

「こんにちは、隣いいますか？」

夕食で賑わう大衆食堂レストランのざわめきの中、よく通るボーイソプラノ。頭上から掛けられた声に、少女は振り向いた。と同時に、ひゅつと空を切る音と、誰かの潰れたような悲鳴がした。

振り向いた先で、少年が眉間に突きつけられた黒刃を前に固まっていた。彼はおそろおそろ、ゆっくりと両手を肩の位置まで上げる。

「ウウ、いきなりそれはないさー」同席している仲間のひとりが、のんびりとした調子でもうひとりを 眼光鋭く少年に剣を向ける青年をたしなめた。

「……あ、あの、すいません。お邪魔でしたか？ だったら他をあたりますから……」

すっかり怯えたようすの少年を見つめていた少女は、ふいに視線を外すと「神田、よしなさいよ。勘違い、そう云いつつやんわりと刃を押しやった。」

ひとり、少年へ相変わらざる殺気を放つ青年は、自分にへらりと笑いかけた相手に舌打ちし、ひどく不本意なようすで刃を納めた。

「えっと、あの……」半歩ほど後ずさりした少年を、明るい声が引き止めた。

「ごめんなさい、どうぞ座って、」

「ワリい、今ちよつとコイツ気が立ってんさ、」

ふん 不機嫌そうな剣士の吐息に、少しだけ怯えて肩を竦ませた少年は、それでもきちんと礼を述べて空いていた椅子を引いた。

それが、彼ら三人とアレン・ウォーカーとの最初の出逢いだった。

少年は切符を見せて、駅の改札を通った。閑散としたホームに、ぼつりと待合所が立てられている。彼はゆつたりとそこまで歩み、静かに扉を開いた。中はストーブにかけられた薬缶の湯が、沸騰してしゅっしゅっとうと音を立てる以外はしんとしていた。ストーブの周りに黒い団服ゴートを着込んだ若者が三人、めいめいにくつろいだ様子で座っている。少年は視線を一巡させると、暖かなストーブから一番遠く離れた、隙間風の吹く入り口近くの椅子に腰を下ろした。三人だけしかない待合所にやって来た他人に、彼らが視線を向けることはなかったが、場にはそれとわからないような緊張があつた。

くしゅん　少年がくしゃみする。

最初に少年を見たのは黒髪の少女　リナリーだつた。自分たちが占領しているために近寄れなかつたのだらう、ストーブの傍の席へ誘うために顔を上げた彼女は、少年の姿を見て目を瞠つた。

子どもつぼさの残る漆黒の眸レイヴン、まるみを帯びた頬、血色薄く透き通つた肌、小柄な身体には大きめの黒外套　その背に一房流れる、特徴的な白髪。

「……アレン、くん……？」

その眩きに、少年はひどく吃驚した顔を向けた。

「アレンくん、よね？」もう一度問う。その声に眼帯をした青年も本から顔を上げて少年を見た。

「あ……貴方がたは……」少年　アレンは微笑んだ。「夏にお会いしましたね、お久しぶりです」

「やつぱり」「おーっスゲエ偶然さあ」

「またお逢いできて嬉しいです、育ちの良さを感じさせる態度で、アレンが会釈する。

「わたしもよ、リナリーは椅子の上へ編みかけの毛糸の塊を置くと、待合所の湯沸かし器サモウラーの前に立つた。「外は寒かつたでしょう、」熱い紅茶を注いで差し出す。

「ありがとうございます、」アレンは素直にブリキ造りの粗末なコップを受け取った。リナリーの背後で、ラビと神田が黙ってその様子を見守っていた。

「また旅行してるの？」

「いいえ、叔父に逢いに来たんです。もう帰るところなんですけど……うち、親戚が多くなってヨーロッパ中にあるものだから移動するのにも一苦労で……」

アレンとリナリーが話すところへ、音を立てて扉が開かれた。現れたのは手に大きな荷物トランクを持った、帽子の男。

「……ぼっちゃん、お荷物をお持ちいたしましたよ」

「ああ、ありがとう、」アレンはにこやかに返して、そこに置いてもらえますかと滑らかな発音と共に椅子の上を指差す。そのとき男の視線が不自然に動いたのを、リナリーもラビも神田も見逃さなかった。男はアレンの云うとおりにトランクを椅子の上に置くと、帽子をちよつと掲げて出て行った。それと入れ替わるようにして、中年の夫婦が待合所に入ってくる。夫婦は失礼しますね、と断ってラビと神田が座る椅子の隣へ腰掛けた。

「あ……」

アレンがかほそく声を上げるのを、リナリーが怪訝そうに見遣った。「アレンくん……？」
彼の特徴的な白髪が映えるほど、アレンの顔色が青白くなっているのにリナリーは驚く。

「どうしたの……？ 大丈夫？」

少年は答えず、じつと何かを見つめていた。その視線の先に、連れ合いの夫婦がいた。

「すみません、キエフ行きの列車が来るまであとどれくらい待てばいいのでしょうか？」品のいい婦人がラビ

に尋ねる。

「……たぶん、あと三時間くらいかなあ？」あくびをしながらラビが答えた。

そうですか、ありがとう

「エ、ク、ソ、シ、スト」

云うや否や、婦人は隣にいた男性と共に吹っ飛ばされていた。小さな待合所は、その壁の一角を大きな槌で粉々にされ、支えを失いぐらぐらと揺れて崩れ落ちた。崩壊に巻き込まれる寸前、アレンはリナリーの柔らかな腕に包まれて難を逃れていた。いつのまにか地面の上へ移動していたアレンは、不思議そうにぱちぱちと瞬きしたあと、顔色を変えた。

「リナリーさん！ お茶が！ 淹れ立てだった紅茶が服を濡らしていた。」だいじょうぶよ、この服丈夫なの。それよりアレンくん、怪我はない？」

こくん、とアレンが頷くの、リナリーはほっと息をついた。騒ぎを聞きつけて、駅員がこちらへと走ってくる。

「お客様、これは一体？！」

「あー……ストーブの爆発さ、へーきへーき」ラビがへらへら笑いながらさらりと嘘をついた。

「爆発?! お、お怪我はございませんか？」

おろおろとラビと神田に近づいてくる駅員を見たアレンが、はつとして声を張り上げた。

「あぶないっ」

その声に応えるようにして、黒い一閃が駅員の身体を真っ二つにした。がしゅん、と小さな螺子や歯車を零れさせながら崩れていくのは、人間ではない機械メカニカル。紛れもなくアクマだった。

なぜこの少年はそれが判つたのだらう　リナリーは腕の中に抱えた白い子どもを見下ろした。彼は人間のふりをしていたものが、人間でなく崩れていく様を見て驚く様子はなく　ラビや神田が無事であることに心底安心した、という表情をしていた。

「アレンくん……今どうして……」

アレンがリナリーを見た。ひどく怯えた表情で。ぼく　とアレンの唇が音なく動く。だが彼はその台詞を続けることなく、突如響いた悲鳴に小さな身体を振るわせた。

リナリーがその声のした方向を見遣ると、アレンの荷物を運んできた帽子の男が神田に刀を突きつけられ、真つ青な顔でふるぶると震えていた。

その男がやってきてからアクマの襲撃があった。神田は当然、それも同類だと判断したのだらう。ラビも、そしてリナリーも同様だった。だからこそラビは槌を肩に構え、リナリーもまた神田の行動を咎めなかった。アレンだけが「やめてください！」と非難の声を上げた。

彼もやはり人殺しと罵るだらうか　リナリーは沈んだ気持ちで腕の中に少年を留めながら思った。

ダメです、とアレンは叫ぶ。

「やめてください！　そのひとは人間です！」

リナリーは驚いて腕の力を緩めてしまい、その隙に子どもはするりと逃げ出して神田と男の間に立ちはだかった。

「やめてください、このひとはほんとうに、人間なんです」アレンは真剣な声で告げた。

お前に何がわかる　云おうとして神田は言葉を飲み込んだ。すぐさまアレンにも、その痺れるような殺気を向ける。ラビが「あれまー」場違いに泰然とした声を発した。

「……アレン、くん、それ……」

アレンの額から、左の頬へかけて真っ直ぐに、血塗られた疵が鮮やかに浮かび上がっていた。子どもの白い前髪からちらりと覗くのは、紛れもなくアクマの逆五芒星。

「信じてください、このひとは人間です。僕にはわかるんです、」

子どもは突きつけられる切っ先に怯むことなく凜として告げた。

「僕、悪魔が視えるんです」

沈黙を破ったのは、神田の怒気にあふれた声だった。

「悪魔が視える？ 何云ってんだお前……下手な嘘をつくなよ、ただお前も、」

アクマ、ってただけだろっが！

神田は上段に構えた刀を子どもの白い頭目掛けて容赦なく振り下ろした。

アレンは避けることをせず、ただぎゅっ、と両目を硬く瞑った。しかし恐れていた衝撃が訪れることはなく、代わりに彼を包んだのは軽やかな浮遊感だった。

「リナリー?!」血迷いやがったか 神田が悪態をつく間もなく、周りに銃弾が降ってきた。ラビが槌を回転させてそれを防ぐ。ちっ、と神田は舌打ちした。「まだ居やがったのか……!!」

アレンと帽子の男を鮮やかに攫ってみせたリナリーは、離れた場所に二人を下ろすと、にこりと笑いかけた。

「ここに居てね、」

「リナリーさん……」アレンが泣きそつに 彼女にはそつ見えた。「アレンくんの云うこと、信じてみるわ、」

わたし」毅然として告げる。

アレンは頷くと、あそこ、とだけ云つてリナリーの背後を指差した。小さな田舎の駅の、屋根の上。神田とラビに攻撃するアクマがいた。リナリーは足元の発動させたイノセンスと共に、軽く地面を蹴つて宙に舞つた。たつたひと跳びでアクマの頭上に至ると、まさに天罰とはこう下されるのだと謂わんばかりの鋭さでアクマを地に落とす。

その瞬間きいんと耳障りな音がリナリーの鼓膜を叩いた。

な、に……？

舞い落ちる神の使徒の視界に、それは映つた。じゃ、ら、り、と鳴つたのは銀の鎖だった。天に向けて滂沱のなみだを流す男がいた。顔はその涙と入り混じつた血でまだらに染まり、地獄の底から亡者の悲鳴が溢れ出す。顎が外れたようにがばと大口を開けた男の中身が透けて見えた。どこまでも昏く、壊れた機械音／血の涙を流す男が身体を揺すつたのか／それともこれはアクマの身体が崩れる音なのか。ど、し、ゃ、んそれは酷く不快な落下音だった。ゴオオオオオオと風が唸る音が、リナリーにも、ラビにも神田の耳にも届いた。というよりは、まるで全身に浴びせかけられたようだった。しばらくしてリナリーはじんと腰が痛むのを感じた。そうしてようやく、自分が着地に失敗したことに気付いた。

黒く凝つた穢れそのものである何かが、のた打ち回りながら近づいてくる。

「に、コレ……」震える唇で紡ぐ。口の中に嫌な酸っぱさが広がっていく。

少女の喉から甲高い悲鳴が進つた。「リナリー……ガシャン。」

アクマに止めをさしたのは彼女の仲間だった。心強い仲間　少女が震える声で名前を呼ぶと、二人もほつとしたような顔を見せた。

「あ……」

リナリーの丸い瞳がさらにまあるく見開かれた。恐怖のためではなかった。ただ純粹に、驚きのためだった。

神田とラビもそれに気付いた。あの禍々しい黒い塊から、何かが抜け出ようとしていた。硝子を引つ掻き回した拳句に割ってしまった、そんな音がして たったいま目覚めたかのような、なんともさっぱりとした表情の男がす、う、う、と天に昇つて、消えて逝つた。

「……おどろい、た……はじめて視ました……こんな……なるなんて……」

呆然としていた三人の背後から、そう少年の声がした。アレンだった。

「お前、悪魔が視えるつて、そう云つたよな？ アレン、」

ラビが悪魔の発音に気をつけて云つた。三人が見つめる白く小さな子どもは、その左頬を赤く血で染めている。アレンは視線を左右に逸らし、口籠つた。やがて諦めたように息を吐くと、語り出した。

ぼつりぼつりとアレンは語つた いままでの生を。

左眼の疵の由来 ずっと昔、まだ幼い頃、何かに襲われ死にかかった時のもの。

赤い傷跡 いつまでたつても癒えることのない、繰り返し刻まれる血の色。

左眼に映る奇妙な存在 あるとき普通の人間に混じつて、黒い塊を引き摺る人間を見た。

それは嘆き哀しむ魂だった。その人間の周りでは必ず人の死があることに気がついた。

目に見える濃い死の匂い やがてアレンの周囲の人の目にも映るようになった。

死 皆が盲目的に恐れるもの。死を視る力 誰もアレンを恐れた。

死神に愛された子／呪われ子／悪魔憑きの不幸の子　両親はアレンを川に投げ捨てた。

どこへ行っても嫌われ／罵られ／恐れられて　遠ざけられた。教会の神父ですらアレンに関わるうとはしなかった。不幸なできごとはずべてアレンのせいだとされた。身も心も落ち着く場所はなくなった。

どこへ行っても嫌われた。だからもう逝くところはひとつしかないと思うようになっていた　そんなときに今の養い親と出逢った。そのひとはアレンの呪いを被おうとしてくれた　失敗続きだったけれど、彼は変わらず真摯な態度でアレンに接し続けてくれた。

妻も息子も亡くしていた彼は、アレンを養子にしてくれた　共に祈りを捧げてくれた。

そして左眼の呪いを被うことはできなかったけれど、押さえ込む方法を手に入れた。

「……………あれがなんなのか、僕は知りません……………でもずっと知りたいと思つてた。あれはすごく禍々しいけれど、でも視てるとすごく哀しいんです。僕にはわかる……………あれは悪魔みたいに恐ろしいものだけど、でもなぜだか僕たちに近いもののような気がして……………あ、あなたたちは、いったいなんなんですか?!　どうして、あれを救うことができたんですか?」

「……………救う?」神田が顔を歪ませた。「……………俺たちは別に救つたわけじゃない。アクマを破壊しただけだ」

「そんな…、だつてあのひと、あんなに……………」アレンは泣きそうに声を震わせたが、けして泣く事はしなかった。芯のつよいやつだな　ラビは思った。

「オレたちはエクソシストなんさ」

「……………エクソシスト?」

「そうそう、とラビは幼子に新しい言葉を教えるよう云つた。

「お前が今まで見てきたのはさ、全部アクマだ」アレンは訥々と語るラビの言葉に大人しく耳を傾けていた。ガキだが頭の悪いやつじゃない　ラビは気をよくして続けた。

「アレは人間を襲うんさ。物語の中の悪魔とはちょっと違う……アクマだ。人間を襲うようにプログラムされている、いわば兵器」

ラビはアクマの生み出される過程をおとぎ話でもするみたいに語ってみせた。子どもは漆黒の目をまるまると見開いた。左眼から涙のように流れていた血を拭き取って、ところどころ赤い染みの付いたハンケチを握る右手をぎゅっと握り締めて。

「詳しいことはわつかんねーけど、たぶんお前が視てるのは　その拘束されてるアクマの魂だ」

「たましい……」アレンが呆然とした表情でラビの言葉を反芻した。「アクマだから」

彼らにはあんなにも苦しそうだったんですね　……

咳かれたその言葉は、白々しい沈黙に飲まれて消えた。

《　にわかには信じがたい話だね、》

「まあな、珍しく、神田は素直に電話の相手へ同意した。次の任務地へ向かう長距離列車、一時的に停止した駅の構内の電話機に無線を繋ぎ、神田は本部へ臨時の連絡を入れていた。

規則正しく羽ばたくゴーレムを見つめながら「それで、どうする、そっちに連行するか？」指示を仰ぐ。

神田たちエクソシストの上司である室長　コムイ・リーはしばらく唸っていたかと思うと、ふいに鼻歌を唄い始めた。

「オイ、」

《ちよつと待つてよこれシンキンターイムの音楽ね。君が退屈しないようにつてボクからの……》
「切るぞ。」

《ちよ、ダメ！ 神田君！ 切ったらダメ！》電話機との接続を引きちぎろうとした際のノイズに神田の本
気を知ったのか、コムイが叫ぶ。

「さつさと決める。お前の決定に従つてやる。」舌打ちして、神田が吐き捨てるよう云つた。

《キミはどう思う？》逆にコムイが問う。《そのアレン・ウオーカー君とやらについて》

「胡散臭エ」にべもなく、「だがアクマの魂が視えるつてーのは事実だ。実際当たつてやがったしな」

《人殺しにならずに済んでよかつたねえ神田君》「うるせエ」

それはたぶん、凶星だつた。その証拠に神田は黙り込み、コムイは長くなぐ吐息した。そうして紡ぎだ
された答えを告げる声は、すでに室長としての冷徹さに満ちていた。

《ウオーカー君の左眼に是非お目に掛かりたいね。本部まで丁重にご同行願おうか》

「わかつた。ただし……」

《そうだね。キミの判断でいい、疑わしいと思う行動が見られれば、ただちに拘束だ。責任はボクが取るか
ら。彼の素性についてはこちらで調べさせる。彼の話の裏付けも取るよ》神田の意図を正確に読んで、コム
イはすらすら告げた。《それまで仲良くするんだよ、神田君》

神田はその言葉を鼻先であしらうと、今度こそ本当に通話を切つた。

夕食の時刻はとづくに過ぎていて、食堂車にいる人影はまばらだつた。食後のお茶とお喋りを楽しむ人々
が、何組かいるだけで、テーブルの上は染みひとつ無く綺麗に片付けられていた。ラビは敢えてその時間帯

を選んで、照明を絞った食堂車の扉を開いた。食べ物の濃い匂いはしない。かすかに漂うコーヒーや紅茶の匂いならば、さほど胸やけもせず済みそうだった。ラビは奥まった席の椅子を引いた。給仕がすぐに気付いて注文を取りに来る。ラビはコーヒーを、と告げて懐を探った。万年筆と革の表紙のついた手帳を取り出しテーブルに並べて置いた。列車の断続的な揺れに意識を寄せているうちに、やがて注文の品が運ばれてきた。そのまま飲むとしてラビは　ふと手を止めて添えられていたミルクを注いだ。ティースプーンでかき混ぜながら、ラビは回想する　　昼の出来事／目にしたもの。あの黒はこれよりずっと深かった。苦く、

苦く　アクマのために泣く人間なんて初めて見た。破壊することしかできないエクソシストの行為を、救済だと云い切った白い子ども。頬を伝う赤、見つめる黒い瞳。瞳孔がわからないほどの、あのアクマの嘆きと同じ色の瞳。あの瞳ですとアクマの魂を見つけてきたのか　アレンには、世界はどう映っているのだろう？　きれいはきたない、きたないはきれい　そんな台詞がラビの脳裏を掠めた。ラビはスプーンの代わりに万年筆を手を取った　十八の誕生日におめでとうという言葉と共に贈られた物。

ラビが手帳に綴るのは、ごく他愛も無いことだ。任務先の出来事、目にした珍しいもの、車窓からの景色、出逢った人々。ひとはそれを日記と呼ぶだろう。だがしかしラビはそれを日記だとは考えていなかった。これは人格のようなものだ。ラビという一人の若者の。滑らかなインクから象られる筆記体は、ラビの感じることがありのままに表現されている。師　現ブクマンはいい顔をしない。だが黙認されている。それは譲歩と、ほんの少しの猶予だ。いずれ止めなければならぬだろう。

おもむるに手帳を開く。癖のついたそれは、続きを促すかのように文字とわずかな空白の残る頁をラビに見せた。くるり、ラビは万年筆を手中で回して遊んだ。十数分の後、溜息と共に手帳は閉じられた。ラビは食堂車の明かりが弱く、書き物には適さないことを云い訳にして閉じた。コーヒーはすっきりと冷め切っ

ていた。

「……なにしてるんだお前は、」

呆れ声が上がら降ってきた。ラビは顔を上げる。不機嫌そうな顔の同僚が見下ろしていた。

「……ユウ」

神田はラビの向かいの椅子を引いた。一切の無駄もなく、力加減と、自分の肉体がどう動くかを完璧に把握しきつた動きだ。神田はそれを何気ないふうによつてのける。一切の無駄のなさ。それは美しさだ。ラビは思う。だから凜として見えるのだ。この青年はいつも。

神田はもう既に、いつもの冷静さを取り戻している。ようにラビには見えた。未熟者 晒う師の声が

蘇る。

「あ……」ラビはその常盤色ヒナギクの瞳を見開いた。訝しんだ神田も追って背後を振り返る。食堂の入り口付近にアレンがいた。給仕となにやら話している。ラビと神田の二人に気付いた様子は無い。

ラビはアレンに声を掛けるべきかどうか迷って 神田と視線を鉢合わせた。

「やめとけ、」神田は低い声で告げた。

う ラビは詰まっつて黙り込んだ。給仕がアレンに笑いかけ、アレンもまた微笑んで何が云った。たぶんスパシーバ、とかそういう言葉を。白い子どもは手近にあった椅子に腰掛け、床にぎりぎり届くか届かないかの足をぶらぶら揺らしていた。こちらに気付く様子はまったくくない。

「……考えたんだが、」神田が云った。

「あのモヤシの話がすべて真実だとして」「モヤシッ、」

アイツのことだ、神田は視線で背後を示した。モヤシ。ラビは口の中で復唱した。特徴は捉えているだろ

うが、なんて不名誉な渾名をつけられてしまったらう。

「……アクマを判別できる目を持っているなら、それは教団にとっては有益な存在じゃないか？」

「ああ、」

ラビもそれは考えた。だから素直に頷いた。

「でも、それで？ まさかスカウトするとか云わないよな？」

「莫迦かお前は。そのまさかだよ」

「……スカウト？ 教団に？」

鸚鵡おまむ返しするラビを神田は鼻先であしらった。

「アレ、まだ十二だぞ？」

「俺やリナリーがエクソシストになったのはもつと餓鬼のころだった」事も無げに神田が云つ。

「そりやそうかもしんねーけど……！ でもさ、ほんとにちゃんとした人間かどうか……」

「もしアクマだと判れば即破壊だ。どのみち本部でないと、精密な検査はできねえんだろ？ だったら連れて行くしかねえ。このチームのリーダーとしての俺の判断だ。一応お前にも伝えておく」

「……ちょっと待てよ、ユウ。それだって一度本部に連絡入れてからだろ？ いくらオレらがエクソシスト

だからって、んな勝手な真似 「連絡ならもつ入れた」

「え？」

「コムイに報告した。えらく興味を持ってたぜ。連れて来いってさ、」

神田は静かに席を立った。ラビ、お前が何考えてるかなんて俺にはどうでもいいことだ。そう無情に告げて。

「ただ、お前モヤシを庇ってんのか、遠ざけたいのか、どっちなんだよ」

ラビは答えなかった。神田が冷めた視線を残して団服の裾を翻した。その先でアレンが給仕から小さな包みを受け取っているのが見えた。アレンが食堂車を後にする。いくらか遅れて神田も扉の向こうに消えた。ラビは答えなかった。

冷めたコーヒーは温まらない。

ラビは答えられなかった。

断続的な振動が心地良く弛緩した身体を包む。リナリーは浅い眠りのなかにいた。任務先では、移動中も良眠はできない。任務に対する緊張なのか、団服に身を包み人間の群れの中にいるからなのか。それとも最愛の兄の傍から離れてしまうからだろうか？

大きな揺れがひとつとして、身体の安定を少しだけ崩す。リナリーは身じろぎした。瞼は閉じられたまま。頬は赤みを取り戻しつつあった。リナリーは毛布代わりの膝掛けを肩まで引き上げて、端をしっかりと握り締めた。こんなときばかりは切実に願ってしまう。アクマに見つかりませんように。普段外に出るときから彼女は薔薇十字を隠してしまっていたけれど。

もとかから浅い眠りは、もうすでに眠りとは云えなかった。どのくらい横になっていたのだろう。部屋の中は暗い。二、三時間は経っている様だった。広い個室にはリナリーひとり。ラビと神田に悪かったかな。リナリーは思った。そして座席の上でこれまた器用に寝返りを打とうとした。夢も見ぬまま、今日はもう眠ってしまいたい。そんなリナリーの感覚が、通路を歩む足音に耳を立てる。任務先では、移動中も良眠はできない。いっどこから襲われるか判らない。ラビでも神田でもない軽い靴音。止まった。扉の前。

彼女は静かに目を開いた。

「リナリーさん……？」

小さなノック。ごく控えめな。知った声。「……アレンくん？」

安堵の様子が扉の向こうからでも判った。良かった。零れた吹き。

「そうです、入つても構いませんか……」

リナリーは半ば起こしかけていた上体を慌てて直し、座席から伸びやかな両足を下ろし、膝掛けをきちんと整えた。前髪を指ではらはらと梳いて、目を擦った。

数秒の後、リナリーのどうぞ、という声があつた。アレンは扉を開いた。

「……ごめんなさい、寝てました？」 部屋は明かりが灯されていなかった。窓から月明かりが零れるだけ。少女の姿が夜闇に半分沈んで見えた。

「ううん、ちょうど目が覚めたところだったの、」リナリーは云つた。気分はどうですか、と訊かれる。だいぶよくなつたわ、と彼女は答えた。

「……よかつたです、」

アレンが微笑むのが気配でわかつた。リナリーからは子どもの姿はおろか、表情さえ見えなかつた。まるで闇と話しているような気分になる。リナリーは座つて、と声を掛けた。本当はまだ、アレンと真正面から向き合う勇氣はもてなかつたのだけれども。それはひたすらに隠して、彼女は席を勧めた。アレンの姿が露わになる。窓から射す月明かりに反射して、白い髪や睫毛が月色の光沢を弾いた。

その左頬に赤い疵がないことに、リナリーは心の底から安堵した。

「食堂の人に頼んで、サンドウィッチを作って貰つたんです。ご飯食べてないでしょう？ きっと夜中にお

腹が空くと思つて。どうぞ、」

リナリーの前に小さな包みが差し出された。少女らしい細い指が、そつとアレンの持つ包みに伸びた。かるく指が触れ合つて、すぐに離れる。その指先の冷たさに、リナリーははつとした。

包みを開きもせずに固まるリナリーに、アレンは困つたように微笑んだ。

「好きなときに食べてください……じゃあ、僕はこれで。おやすみなさい、」

アレンはどこまでも紳士的だった。洗練された上流英語を紡ぐ声は声変わりを控えたもので、柔らかくリナリーの耳に届く。アレンはまだまだ子どもの容姿から抜けきれていない少年だったけれど、何気ない仕種の一つひとつがちいさな紳士であつたし、特に女性であるリナリーにはやさしかった。

「……待つて、アレンくん……っ」

部屋の影に再び埋没しかける少年をリナリーは呼び止めた。「なんですか？」どこまでも柔らかさを失わぬい声が切ない。アレンが優しいのは礼儀や義務からだけではない。

「ご、ごめんなさい……」リナリーは胸につかえたものを吐き出すように云つた。「わたし、わたし……っ」

嫌われたくない。疎まれたくない。だから他人にやさしくする。好かれないから。罵られるのはおそろしい。胸の十字はリナリーを拘束し続けてきた。同様にアレンを縛り続けるものがあの左眼なのだ。少女の眦から涙が溢れる。彼はエクソシストを拒絶しなかつたのに。異端者として批難される苦さをじゅうぶん知つていたはずなのに。

「ごめんなさい……わたしアレンくんの……」彼を傷つけたことだろう。彼を捨てた親のように。

しーっ。アレンは人差し指を唇に当てて、やんわりと台詞を遮る。次いでアルカイツクな微笑みが浮かんだ。

「気にしてません。慣れっこですもん。……それより僕の方こそごめんなさい。嫌なものを見せてしまつて。動揺してて……左眼を抑えることができなかったんです」

リナリーはすぐにその言葉を否定できない自分の弱さに涙を拭いた。確かに二度と、あんなものは見たくない。夢に見そうで恐ろしくて堪らない。でもせめてアレン自身を否定したくはない。少女はゆるゆるとかぶりを振った。すつかりと涙を拭つてしまつと、リナリーは顔を上げてアレンと正面から向き合つた。

「わたしアレンくんが好きよ」

白い子どもの頬が、薄闇のなかでも朱に染まつていくようすが、はつきりと見えた。

「リ、リナリーさんっ?!」

「変な意味じゃなくつて。アレンくんのこと嫌つてしまいたくないの。ただ友達に……なりたいの、」

その慌てようがおかしくて、リナリーはくすりと笑いを零した。赤いままの頬でもごもごとアレンが口籠つていると、個室の扉が前触れなく開かれ、子どもはその音にちいさく飛び上がった。

「……なにやつてんだ、お前ら、」

神田が呆れたようにアレンとリナリーを交互に見遣つた。彼は薄闇でもしつかりとした足取りで壁際まで歩み、壁に固定された燈火ランブに火を灯した。暖色の光が目優しく、部屋を明るくする。

神田は座席にどつかりと腰を下ろすと、立つたままのリナリーを一瞥した。「もついいのか、」

「平気よ」

リナリーは微笑んでみせた。幼い頃からの気安さで応えた。さりげない心遣いはありがたかつた。神田は座席に転がっていた包みを手にする。「アレンくんがサンドウィッチを届けてくれたの」神田がアレンに視線を送る。子どもはにこりと笑つた。

それじゃあ僕はこれで　そう云つて退室しようとするアレンを「ちょっと待て」今度は神田が引きとめた。リナリーは珍しそうに神田を見下ろす。その顔は普段と変わらず涼しげで、なにを考えているかわからない。

「……お前のことを俺たちの上司に報告した。」アクマの魂を見る奴がいる。ってな。お前を本部まで連れてくるよう云われた。準備が整い次第、俺たちの仲間を引き渡す。わかつたな、モヤシ。」

アレンはドアノブに手を掛けたまま、そう一方的に告げる神田を訝しげに見た。モヤシ　そう呼ばれたことに盛大に眉をひそめてみせたが、それよりも戸惑いの方が大きい様子だった。唯一言葉の意味を正確に把握したリナリーが、反論のための声を上げた。

「どういふこと、アレンくんは……っ」

「関係ないとは云わせないぜ、」冷徹とさえいえる声音で神田は切り返した。リナリーが悔しそうに唇を噛む。自分が寝込んでいる間に、なんて余計なことを　アレンという、これほど奇怪な存在を知った教団が、ただで放つておくはずがない。

その気持ちを見透かしたように、神田がさらに言葉を重ねた。

「モヤシが貴重な存在だつてのはお前にだつてわかつているだろう、リナリー。人間の中に紛れ込んでいるアクマが判別できるようなになれば、今まですつと受身の反撃しかできなかった俺達が先手を打つて攻撃に転じれるようになるんだぜ、」

「わかつてるわよそんなことは！　でもっ」きりきりとリナリーは眉を吊り上げて神田を睨んだ。神田も真正面からその視線を受け止める。ひとり取り残されてしまったアレンが、睨み合う二人の気配に圧されながらおどおどと口を開いた。

「あの、すいませんちよつと……意味が……」

「仲間」にならねえか、つてことさ。」

びくり アレンは肩を震わせて声の主を振り仰いだ。

中途半端に開けられた扉の隙間、蜜柑色の髪 ラビが立っていた。

ラビはゆつくりと扉を押し広げていく。驚いてこちらを見つめる子どもにニコリと人当たりの良い笑みを浮かべてみせた。

「 “黒の教団”は、きつとお前を歓迎するぜ。アレン・ウォーカー」

「わたしは反対よ!!」

いまいち事情の飲み込めていないアレンを別の車両の個室に送って戻ってきたリナリーは、部屋に入るなりそう叫んだ。神田が奇立たしげに舌打ちする。ラビはやれやれと溜息をついた。彼女を気持的に納得させるのは随分と骨が折れそうだ。

「反対とか、そういう問題じゃねえさ、リナリー。これはオレらの班への新しい任務。わかるだろ?」

気丈な少女は唇を噛み締めた。教団からの命令ならばエクソシストである彼女たちは従わねばならない。

しかし、自分の与り知らぬところで勝手に事を進めた神田とラビをリナリーは許せなかった。

「……ふたりともアレンくんがどんな目に遭うか少しは想像つくでしょうに!」

それは悲痛な叫びだった。

神田は視線を窓の外へと逸らし、ラビは腕を組んで俯いた。重い沈黙が流れ、リナリーはとうとう部屋を飛び出して行った。

沈黙を破ったのはラビだった。怒らせちゃったさ、と呟いた彼の声はひどく覇氣のないものだった。

「……お前も反対なんじゃなかったのか、ラビ」

神田は云った。食堂車で話した時は、確かにこの件については乗り気ではなかったはずだ。ラビはまあね、と肩を竦めた。

「……ここでオレらがアレンの存在を報告しなくても、いずれどこかで噂になって教団の耳に入るよ。今までそーゆーのがなかったこと事体が不思議なくらいなんだからさ。だからそれなら、今ここでオレらが見つけまつた方がいくらかマシってことだろ？」

そう云ってラビはバンダナを額から外して首に掛け、髪を下ろした。

「それに、オレらが傍に居ればそんな酷い扱いも受けなくて済むかもしれないし？」

「ふん……」

下ろした髪をくしゃくしゃとかき混ぜながらラビが笑う。

「……ユウはそう考えてるんだろ。云ってやれば良かったのに。リナリーにさ」

「うつせえ。なんで俺が、」

だって云いだしつべはユウじゃんかよー、口を尖らせてラビは座席にころんと寝転がりながら告げた。

面倒臭え 神田は云った。「あいつなら自分で気付くたろ、そんなくらい」

「でもリナリー怒らすと後が怖えなあ、ラビさんは。」その言に神田は無言で眉をひそめた。どうやら思い当たる節があるらしい。そんな神田を見てラビは苦笑し、目を閉じて眠りに就こうとした。

「モヤシ、同意すると思うか、」神田は横になり目を瞑ったラビにそう問いかける。

「たぶんね、」

ラビは大きく口を開けて欠伸しながら答えた。仲間にならないかと聴いた時のアレンの、瞳の底で動くものを見たことを思い出す。不思議な輝き。その呪いのために実の親からすら疎まれた子ども。そんな彼が見つけた希望を映した輝きならばいい。ラビは思いを巡らせた。

「それに、」

同じく眠ろうとして六幻むくわんを腕の中に抱えようとしていた神田が、ちらりと視線を寄越した。

「……リナリーは今晚アレンのところに行つて帰つて来ないだろうし」

神田が盛大に顔をしかめてみせるのへ、ラビは予想通りの反応が返ってきたと口元を歪めた。

神田はしかめっ面のまま、お馴染みの舌打ちをしたあと、黙つて六幻を抱え直し、目を閉じた。ラビが密やかに笑いを零す。いくら神田でも、喧嘩したばかりのリナリーを追いかけて、どちらかをこちらに引つ張つてくるのは気まずいらしい。

そもそもあの小さな紳士であるアレンがリナリーをよからぬ意味で襲うとも思えないし、彼女とてただの無力な少女とは違つた。アレンの素性が完璧に白というわけではなかったが、ここでリナリーを襲えば自分は黒だと教えるようなものだ。もし自らの正体を偽るほど小賢しいアクマならば、今この状況で動きはしないだろう。とラビは思つた。

朝までリナリーの機嫌が直つてゐることを祈りながら、ラビは上等とは云いがたい座席の上で眠りを引き込むべく目を閉じた。

アレンはリナリーに案内された個室で、腰を落ち着け寝るために備え付けられていた毛布を引つ張り出した。広げると少々微臭い。その匂いに細い眉を蹙めながら、小さな身体の腕を左右にめいっばい伸ばして毛

布をばさりと振るつて、座席の上にとりあえずと思ひ無造作に放り投げた。この個室より上等の部屋をアレンは取ることもできたが、あえてそうはしなかつた。一晚くらい、三等の個室でだつて我慢できる。だいたいここは東欧だ。それほどの贅沢は望めない。アレンはおもむろに羽織つていた外套を脱いだ。それを壁際のハンガーに吊るし、きちんとボタンを留めて形を整え、軽くはたく。ポケットに首元から引き抜いた緑のリボンタイを丁寧に折りたんで仕舞う。それらの動作はひどくゆつくりと行われた。まるで神聖な儀式のように。燈火に向かい灯を消そうとしていたアレンの耳に、空耳とも取れるほどの、微かなノックの音が二回届いた。振り返り、扉に近づくと確かに人の気配。

「どちらさまですか……？」

「……わたし。」

アレンは大慌てで扉を開いた。目の前にどことなく儼然とした少女が現れる。

「リナリーさん？ いったいどうして……」

戸惑い自分を見上げてくるアレンに、リナリーは淋しげな表情で告げた。

「ごめんなさい、アレンくん。……泊めてもらえる？」

アレンは驚いたままの口を閉じると、すぐににっこりと笑顔になり半歩下がる。「どうぞ、レディ。」

ラビたちのいる個室と寸分違わない部屋に入るなり、リナリーは勝手知つたるとばかりに仕舞われていた毛布を引つ張り出して広げた。そのまま座席のひとつを占領する。アレンは苦笑を零し、明かりを消しますよと断りを入れて燈火の螺子を捻つて灯を消し、リナリーの向かいの席へ腰を下ろした。

断続的に響く列車の走る振動音。夜の深まりは、その音をさらに大きく響かせる。それに意識を傾けつつリナリーはアレンをそっと伺つた。今晚は満月らしく、車窓に下ろされたブラインドの影から洩れる月

明かりのおかげで夜闇のなかでも不自由しなかった。ぼ、つ、とアレンの髪が発光するように見える。不思議な子。リナリーは胸の裡で呟いた。年齢にそぐわない、落ち着いた物腰と眼の光。そこになにかしらの諦念あきらめが見え隠れするのは、おそらく間違ではないと思う。子どもをここまで大人びさせる原因となったのは、いまはすっかり消えて隠れてしまったあの左眼の。

「……リナリーさんは、」ふいに呟き。

「ミスじゃなくて、リナリーでいいよ。アレンくん」

砕けた口調で云うと、アレンは嬉しそうに笑い、リナリーと呼んだ。それが妙にくすぐったく感じられて、彼女は微笑んだ。

「リナリーは、その、”黒の教団”は長いんですか？」

きつと教団のことについて訊かれると思っていた。リナリーはゆるゆると口を開いた。

「うん……もう何年もいるよ。わたしと神田はけっこう長い方。ラビは三年目になるのかな」

「カンダさんとは幼馴染なんですか……？」

「そう、だね。似たようなものかな。一緒に修行したり、任務したり……友達とはちょっと違うけど」

「いいですね。憧れるなあ。そういうの」

「アレン、くん……あのね、さっきのことだけど、」云いにくそうに切り出して、リナリーは一旦目を伏せる。

「嫌だったら、断ってくれていいの。もう報告が行っちゃったから、教団側がしつこく誘ってくるかもしれないけれど……あの、あのね、わたしの兄さんが教団の幹部なの。だからわたしから強く頼めば、それも

「リナリー」

存外に強い声音で名を呼び、言葉を遮ったアレンに驚いてリナリーは彼を見た。視界を塗りつぶす灰色の中で、彼をあらゆる白さと瞳の黒さが際立っていた。

「僕が、いたら 迷惑ですか？」

「そんなことない！ そんなことないよ、そうじゃなくて」

リナリーは寝かせていた上半身を思わず起き上がらせた。アレンの目はやさしい。とたんに何も云えなくなつて、リナリーは口を閉じて押し黙つた。

「リナリーが、色々心配してくれてるのはわかります。でも決めるのは僕だし 僕はずっと、この左眼が何かの役に立てばいいのにつて、ずっとそう思つてきました。だから、このお誘いは願つたりなんです。」

アレンの目はやさしい。同時に有無を云わせぬ殺^{つよ}さがあつた。

覆すことのできない意思を目の当たりにして、リナリーは深く嘆息した。「……もう決めたんだね、」
につこりとアレンは微笑んだ。もう息^{やす}みましよう、そう一方的に告げて毛布を引き上げ瞳を閉じるアレンの顔をしばし見つめたリナリーは、再び溜息をついたのちに身体を横たえた。

できれば彼の胸に、十字架が飾られずに済むことを祈りながら。

翌朝、リナリーはアレンと連れ立つて食堂車へと移動した。すでに席に付いて朝食を摂っていたラビが、軽く手を挙げてふたりを呼んだ。昨夜、八つ当たりのように言葉をぶつけて飛び出したっきりの自分に、まるで屈託のないラビの態度に相変わらずの底知れなさを覚えて、リナリーはちょっとあきれたように息を吐いた。

「おはよう、ふたりとも」

「おはようございます、ラビさん、カンダさん」

「おはよーさん、うちのお姫様が邪魔して悪かったさ。一緒にいて寝れた？」

「……え？ ええ、きよとんとしたアレן ほんの子どものおお。」

「それ、どういいう意味なの、ラビ？」につこりとリナリー 目だけが完全に笑っておらず。

「いやっ……あの、べつに深い意味はねーって、な、ユウ！」

コーヒーカップに口を付けていたところへ隣から肘で突付かれ、神田は迷惑そうに「知るか」とラビを睨んだ。向かいに腰掛けたリナリーを一瞥する 探るような視線。

「……なに、」やや無然としながら。「おはようくらい云ってくれたっていいじゃない」

「昨夜飛び出してっただやつが云うか、」

「……悪かったわよ、わたしも……云い過ぎたわ。もういいから……ごめん、」

咳くように云って、リナリーが顔を逸らした。ツインテールがざらりと揺れる。ラビの側からは表情は見えない が、彼女が幾分か照れているのは容易にわかった。

神田はとくに重要なことでもないといわんばかりにコーヒーの残りを啜る。ラビは隻眼を細めてふたりのようすをにやにや見守った。ふと、ひとりだけ取り残された少年が気になり、さりげなくラビは目を側めた。

アレןは儂げにもみえる微笑を浮かべていた。羨望のままなし だけれどけて手を伸べるわけでもなく、諦めの色が漂う瞳で笑っている。

人間でないものに、こんな表情できはしない。どことなく力が抜けて、ラビは椅子の背凭れへ体重をかけた。働き者の給仕が四人分の朝食をいそいそと運んでくる。アレןが給仕に水を注文した たしか初めて出逢った時も、彼はわざわざコップ一杯の水を頼んでいた。お腹がいっぱいなんですと云って、水とパンと

サラダとそれだけを。そんなことを、ラビはぼんやりと思い出していた。食事を前にアレンがちいさく十字を切り、手を組む姿はその記憶と重なった。

やや大きめの振動が車体に響いた。食器が触れ合いカタカタ鳴く。グラスに手を伸ばしかけていたアレンが、急に指を引っ込めた。代わりに口元を押さえる。神田の髪の色より濃い、漆黒の瞳が揺れていた。

「アレン……？」

「……みませ、」か細い声で断り、アレンは席を立った。異変に気付いたりナリーが、後を追おうとして腰を浮かせたのを、アレン自身が留まらせた。「だいじょうぶ、よく……あることですから、」
「でも……ひとりで平気？」

白い頭が上下する。踵を返して、少年はテーブルの間をやや足早に去っていく。途中ですれ違いざまに男性客と身体をぶつけたが、アレンは詫びもせずそのまま食堂車を出て行く。よっぽど余裕がなかったのだらう。ラビは思い、彼の代わりに相手に謝っておく。幸いにも相手は柔和な男で、余計なトラブルには至らなかった。

「どうしたんだらう……アレンくん、」少年が消えた先を心配そうに見遣りながらリナリーが呟いた。

「列車に酔いでもしたんじゃないか」

「それ今更だろ。すぐ戻ってくるさ、きつと」

だがしかしラビの予想に反して、彼らが朝食を終えてもアレンはテーブルに戻っては来なかった。

少年の姿は、列車の最後尾にあった。

連結部分の狭小な場所。金属の板の上にそのまま座り込んで、広がる景色を眺めていた。

追い越し、過ぎ去り、やがて見えなくなっていく景色　何もないレールの上。いままでの軌跡を記憶に刻み付けるように、アレンはじつとそれらを見つめ続けていた。

ぎい　扉が開く。座り込んだアレンの隣に、ブーツが並んだ。「やっと見つけたさ、」

「ラビさん……」

座り込み、視線を同じくする。鉄柵の間の光景　冬を間近に控えて、灰色に滲んで沈んでいく、ひっそりとした世界。「リナリーが心配してるぜ、」

「うん……」そう云うアレンの顔色は　もともと色白だがそれほど悪くはないように見える。横顔を見つめていると、苦笑が零された。「べつに付き合わなくなつていいんですよ、」

「そういうんじゃないやねえけどさ、」口籠る。「……戻らねえの？」

足元からしんと寒さが這い上がる。ラビは身震いした。隣の少年は黙り込んだまま、動く気配すらみせない。風圧であられる首元は、血が通っていないのかと思うほどに白かった。

ラビは無言で立ち上がりつつ、巻いていたマフラーを外した。

アレンが目を睜ってラビを見上げた　ふいを突かれた子ども顔だった。

「……貸してやるさ、」寒さを振り払うように、明るい声でラビは云った。「あとでちゃんと返すこと！」

アレンはマフラーを手繰り寄せ握り締めた。歪められた目元は、すぐ顔を伏せられたために見えなくなつた。しばらくそのまま、ラビは何も云わない頂垂れた頭を見つめた。アレンはやはり動こうとはせず、さらにちいさく蹲つたようだった。

汽車の鳴らす警笛が数回、さびしげな景色に響いては消えた。

風がびよ、と吹いて、ラビはくしゃみした。

「……寒くて死にそうさ、」

「……じゃあ、風邪をひかないうちに戻らなくちゃ、」独り言のようなラビの呟きに、アレンが応えた。「僕のせいにされても困ります」

「あーホットチョコが飲みてえ」

「僕、チョコレートはきらいです」

「甘いもの苦手なんか？」

「……マシユマロ入りのココアが飲みたい、」

「甘さじゃそう変わんねえじゃん！」

アレンが口元に微笑みを浮かべた。それだけで血の通ったような頬になった。

「ねえ、風邪をひかないうちに戻らなくちゃ、」漆黒の晴がラビを見た。「ホットチョコ、食堂にあった？」

「どうかね、」自然と、ラビは手を差し出していた。するりと冷え切った右手が乗せられた。引つ張りあげ

て立たせてやる。「ココアはあつたぜ、お兄さんが奢ってやるよ」

マシユマロ入りですよ、とアレンは笑った。

「もう、アレンくんだったら……」どこに行ってたの、と少女はかわいらしく怒ってみせた。

「心配させてごめんなさい、リナリー」白眉を下げて アレンの云い訳「……たまにある、発作のようなものなんです。一度起こると収まるまでどうにもならないから レディに見せるには、みっともなく、」

「そんなことないのに、」寂しそうにリナリーは目を伏せた。「今度はどこかに行ったりしないですね」

なんだかすっきり姉と弟のような遣り取りだった。ラビは苦笑し、神田はさほど興味なさげだった。

個室で四人膝を付き合わせる。朝食を摂り損ねたアレンのために、リナリーがバターロールをいくつか取っておいでしてくれていた。アレンはよほど少食なのか、パンを二切れ食べたところで満腹だと云ったので、残りはラビが始末することになった。

昼前に彼らは列車を降りた。駅の周辺の宿屋で昼食を済ませ、今度は馬車で港へ向かう。移動時間の暇潰しは専らおしゃべりだった。好きな本や音楽、流行のもの、行ったことのある史跡・名所　とりとめなく、くだらないはなし　けれど楽しく過ぎる時間。

そうして自然とアレン自身についての話になる　リナリーは純粹に興味のため／神田は冷静に見極めるため／ラビはその記憶力から少年の語ることに矛盾はないか検証するために　それぞれの思惑で耳を傾けた。そんなことは露ほども気付かぬようすで、アレンは質問されることに對して丁寧に答えていった。

運河を利用するための港町は、他国から積極的な移民を受け入れて開けた町だった。

神田とリナリーに荷物を任せ、ラビはアレンと共に乗船のための切符チケッを取りに行く。数々の言語に通じているラビが交渉するのはいつものことだった。アレンもこの国の言葉は簡単なものならば解るらしい。売人とのやり取りは比較的穏やかに済んだ。隣からアレンが、相場の十倍なんてよくもぶつかげられますね、あなた」天使みたいな笑顔で云ったストレートな一言に、売人がなにを思ったのか急に態度を改めたからだった。

「そつえば、これからどこへ向かうんですか？」

「あれ、云つてなかつた？」ポケットからしわくちやの紙幣を取り出し、皺を伸ばしながらラビが答えた。「河を下つて黒海ウミまで出る。それから金角湾イスタンプル岸都市で一仕事さ」

「イスタンブル……まさかセント・ジョージ大聖堂教会？」

「すげえな、アレン。大正解」

ラビが思わず手を叩くと、子どもはむっとしてこちらを睨んできた。「これくらい、常識の範囲です」

「イングランド人の鑑だねえ。…その全地総主教庁にちょっと用があるさ」

「ちよっとつて……」まるで散歩の途中に立ち寄るみたいな気軽さで云うラビに、アレンは呆れたように息をついた。「じゃあ僕を教団の本部まで連れていってくれるのは、そのあとですか」

「そうだなあ」お釣りを受け取ると、ラビはコインをしまい、アレンに四人分のチケを手渡した。

「しばらく連れ回すことになるかもしんねーけど、お前大丈夫？」

「ええ……養父には手紙を書いたので。戻るのが遅くなっても、学校にはうまく誤魔化してくれると思います。口だけは達者なひとですから」

「そのおやじさんて、何してるひとなんさ？」

「政治屋ですよ。もう引退してますけど……ホイッグ党の」

にこやかな口調がふいに途切れた。少年の気配が鋭く緊張していくのを、ラビは敏感に察する。

目をわずかに瞠って、アレンは口を閉ざしていた。幾度かの瞬き、息を呑む音　ゆっくりと視線が寄越された。

「いるんさ。」

こくりと頷く白い頭。ラビはふうんと相槌した。なんでもないかのように、緩んだ歩調のまま仲間のもとへと向かう。道すがらアレンから情報を聞き出す。

戻ってきた二人をみとめた矢先、神田が厳しい声を出した。

「なにかあつたのか、」

「ああ……アクマが判つてるだけで八体。三、二、二、一、さー」云いながらラビは数と方角を合わせて指で示した。リナリーがさつと眉をひそめる。アクマはこちらを囲む形で位置取っている。神田は黙りこくつたままのアルンを見下ろした。「どいつだ？ 教える、」

「お、教えるたつて……」

「どんな姿形してるか云えつてんだよ」

「云つて判るんですか、こんなに人がいるのに」

「じゃあお前のその左眼を貸しやがれ」こつして押し問答をしている間さえ惜しい。神田は苛立ちを募らせた。「お前が俺たちのサポートをするつてエのはそういうことだ。なんでもいい、一番判りやすい方法でアクマを教える」

「そんな急に……」神田の気迫に押されるように、アルンが半歩下がる。リナリーに縋るような視線が向けられる。彼女はイノセンスの爪先をとんとんと鳴らした。「云つて、アルンくん」

アルンが唾を呑み込むのがわかつた。

「じょ……女性です。全員、女の人の姿をしている……」服の形、色、帽子の飾り、外見の年齢。口早に告げられる。ラビはそれを一度で頭に叩き込むと、周囲にさつと視線を走らせた。

「三時と九時方向、五ヤード向こうにいるぜ、」

「露店出してるやつか？ その前に旅行客風の二人連れ。確認した」

「乗船の列のなかにもう一体いるの？」リナリーが足元に置いていたトランクを持ち上げる。「緑の鳥の羽ね……よく見えないわ」

「後ろは河だ。両翼から崩すぞ」神田が腰に溜めていた刀を抜いた。次いでラビも太腿の槌をほどよい大きさにして構えた。笑顔と共にリナリーがアレンに荷物を預ける。「ここにいて、動かないでね」アレンはすっかり戦士の顔をした三人に戸惑っているようだった。

「あの……っ」

「っざけんじゃねえぞこのクソウサギ!!」

「そりゃーこつちの台詞さ!! ユウ!!」

「俺のファーストネームを口にすんなってんだろーが!!」

「なんだよ、ヤル気か? 相手してやんよ」

「そのふざけた槌ぶつた斬つてやる」

互いにイノセンスを構え、神田とラビがいがみ合う。突然の大声に周囲からの視線が集まる。得物を手にして対峙する若い青年二人を見た人々は、その年頃の争いは珍しくもないといったふうは無言で遠巻きにした。「もっ、ふたりともやめてったら!」少女が叫ぶ。同時に閃光が奔った。

目の前の相手に振り下ろされると思われた槌と刃は、ぎりぎりで躲かされ、黒い団服はすれ違つた。アレンが示したアクマたち。人の形をしたそれらの脳天に迷いなく槌を叩きつける／躊躇わず斬り裂く。

皮を被つた機械の中身が音立てて地面に崩れ散らばつた。あつという間に四体のアクマを破壊した彼らは、悲鳴を上げ逃げ惑う人々の合間を縫つて、残りの敵へと肉薄する。神田は風のごとく駆けて露店の前で右往左往していた女の首を薙いだ。リナリーが飛び出し、強烈な蹴りをもつて体の胸に叩き込む。ラビの槌が槍のように伸びて、一番遠くにいた露店の女店主の胸を貫き燃やした。

残り一体 振り返つた先で、少年の後ろに迫る異形の機巧を見た。

「アレくん!!」

リナリーが地を蹴るより速く、巨大化した槌が最後のアクマを殴打／黒い刃がその頭部を串刺しした。目と鼻の先にふたつのイノセンス　ふらふらとアレくんが地面に座り込んだ。

「ちょ、ユウ！　刺さってる！　六幻刺さってるさ!!」

「見れば分かる。」投擲した刀を回収する神田　アレくんを見下ろす。「当たり損ねたな？　モヤシ」

「ひでエさ、」ぶつぶつとラビ。「キズモノにされちゃった……」

「妙な云い方すんじゃあねえ、」青筋立てて神田がラビを睨んだ。彼は最小化した槌の表面についた傷をしきりに撫でている。自然とアレんの傍に集合した二人へ、少女は靴音高く近づいた。

「ふたりとも、」腰に手を当て、満面の笑みで。「アレくんに謝るのが先じゃないの？」

「え、あ、ごめん」

「ふん……」

「わたしじゃなくって！　だいたい神田は六幻を投げる必要があつたの？　ちょっと聞いてる？」

頭上で交わされる会話に、アレんはたまらずといったようすで声を上げて笑い出した。

初めて見る、年相応の無邪気な笑顔だった。

